

肱川水系 河川整備計画
【上流圏域】

平成 20 年 9 月

愛 媛 県

肱川水系 河川整備計画【上流圏域】

- 目 次 -

| | |
|---|----|
| 1 圏域の現況と課題 | 1 |
| 1.1 圏域および河川の概要 | 1 |
| 1.2 現状と課題 | 6 |
| 1.2.1 治水の現状と課題 | 6 |
| 1.2.2 利水の現状と課題 | 7 |
| 1.2.3 河川環境の現況と課題 | 8 |
| 2 河川整備計画の目標に関する事項 | 11 |
| 2.1 計画対象区間 | 11 |
| 2.2 計画対象期間 | 11 |
| 2.3 計画の見直し | 11 |
| 2.4 洪水による災害発生の防止または軽減に関する事項 | 11 |
| 2.5 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項 | 11 |
| 2.6 河川環境の整備と保全に関する事項 | 11 |
| 3 河川整備の実施に関する事項 | 12 |
| 3.1 河川工事の目的、種類及び施工の場所並びに 当該河川工事の施工により設置される河川管理施設の機能の概要 | 12 |
| 3.2 河川の維持の目的、種類及び施工の場所に関する事項 | 21 |
| 3.2.1 河川維持の目的 | 21 |
| 3.2.2 河川維持の種類及び施工の場所 | 21 |
| 3.3 河川の整備を総合的に行うために必要なその他の事項 | 22 |
| 3.3.1 洪水対策 | 22 |
| 3.3.2 流域における河川管理の取り組みへの支援に関する事項 | 22 |

圏域の現況と課題

1.1 圏域および河川の概要

河川整備計画の対象区域である肱川水系(上流圏域)は、野村ダム上流部に位置する愛媛県管理区間を対象とし、愛媛県西予市の一部(旧宇和町の大部分)約106km²の区域である。

域内人口は約1万8千人で、そのほとんどが河川沿いに開けた宇和盆地に集中している。

圏域の地形は、東側の大野山、大判山を連ねる標高800m級の山脈と、西側の鳥越峠、堂所山の標高500m級の山脈に挟まれた地形で、標高約200mの宇和盆地が形成されている。山地部頂上付近は急峻な地形を示しているが、平地部に近づくに従い比較的なだらかな地形である。平地部は盆地となっており、平坦な地形が開けている。

圏域の大部分は秩父古成層からなり、山地部分は砂岩・粘板岩等からなる。このため、圏域北部に見られる三波川帯、みかぶ帯に比べ安定している。肱川周辺に開けた平地部は沖積層からなり氾濫土砂が厚く堆積している。現在では水田などとして利用されているが、近年までは沼地や湿田であった。

圏域の気候は、瀬戸内海気候区域に属し、年平均気温は15前後で、年間を通じ温暖であり、年平均降水量は約1,900mmで降雨は梅雨・台風期に集中する。

古くからの集落は、山沿いの平坦地に形成され、河川沿い及び平坦地の大部分は水田として利用されている。平地部を南北に縦断する国道56号沿いに市街地化が進んでおり、最近では、河川周辺部の平坦地の宅地化が進んでいる。

圏域の産業構造は第1次産業約12.9%、第2次産業約25.5%、第3次産業約61.6%である。四国横断自動車道が延伸したことにより、西予宇和インターチェンジ周辺は商業地として発展している。

圏域の中心である宇和盆地の歴史は、約三千五百年前の縄文時代に始まる。弥生時代に入ると肱川周辺の広大な盆地で稲作が始まり、愛媛県南予一の村となっていく。

稲作文化とともに発展した宇和地方のもう一つの特徴として、学校、教育に関する文化財が数多く残されている。西予市宇和町内には今も美しい学校建築が存在し、文化財となっているとともに、観光地として訪れる人も多い。その代表的なものとして、開明学校、現在は宇和米博物館となり、百間廊下として有名な旧宇和町小学校校舎などがあげられる。



2007年12月30日撮影

開明学校（国の重要文化財）



2007年12月30日撮影

宇和米博物館

旧宇和町は、平成16年4月の町村合併により周辺4町と合併し西予市となった。西予市は「自然と文化と人が輝く交流のまち」を基本方針とし、次のような目標を掲げている。

- 安全・安心の地域づくり
- みのりとまちの交流ゾーンとしての整備
- 定住環境の整備

西予市は、八幡浜市・大洲市とともに地方拠点都市の一翼^{いちよく}を担^{にな}う町として、森林、田園、肱川、宇和海などの豊かな自然と景観に囲まれた風土の中で、高速道路インターチェンジのもつポテンシャルや歴史・文化的資源を活かした新たな産業の導入・育成し、活力とやさしさにあふれた豊かな暮らしを提供するまちづくりをめざしている。